

山部会の振り返り

蔵治光一郎

1908年、明治用水組合会（後の明治用水土地改良区）初代理事長の岡田菊次郎は、下山村（現豊田市下山地区）の森林を水源林として購入した（その後、豊田市旭地区、根羽村、平谷村に拡大）。それから約100年が経過した2009年、中部地方整備局が策定した「矢作川水系河川整備計画」に「各組織や団体が実施している森林保全、水質保全、三河湾再生に向けた取り組み等について、今後のさらなる充実に向け行政、住民、学識者等が情報共有、意見交換を実施し、さらに課題を解決するための場として新たな枠組み（流域圏懇談会（仮称））を検討していく」という文言が盛り込まれたことを受け、2010年8月に矢作川流域圏懇談会が設立された。ここに「森林保全」と明記されていることから、懇談会内に「山部会」が設置され、山部会の主要な議題の一つとして「森の課題」が取り上げられ、今に至っている。

河川法の定めにより河川整備計画策定過程には矢作川流域委員会が関わった。矢作川源流の長野県根羽村から参加した委員が意見を述べたほか、中下流の市街地の市民団体や農業関係者、下流の三河湾の漁業関係者が上流の森林について意見を表明した。例えば次のような意見である。

○東海豪雨については、洪水だけでなく、流木や山の崩壊による流出土砂についても考えていかなければならない。治山はとても重要であり、水源涵養の森をつくるようなことを並行して考えるべきである（第二回）

○森林については、緑のダムという議論もあるが、その効果については現段階では、まだ解明できていないという印象を受ける。しかし、東海豪雨で感じたことは、大量の土砂や流木が流出するなど山地はかなり荒廃しているが、矢作ダムで捕捉し、下流への流出を防ぐという効果があったということである（第三回）

○人工林の荒廃や河川流量の減少といった問題は、水源涵養林保護政策が欠如していることによる（第四回）

○森林は戦後急速に荒廃した。また、森林に関する調査・研究は進んでいると思う。流域の保水能力と治水との関係を知る上で、こうした情報の収集にも努めていただきたい（第六回）

○川と山と区別されて一番困るのは住民である。災害が起きたときに整備してもらいたいところが整備してもらえない。河川管理者が川の外まで考えれば川の中のことも上手くいくのではないか（第七回）

これらの意見に対して、事務局（豊橋河川事務所）側は以下のように回答している。

○森林の荒廃やその整備は、非常に重要な課題であると認識しており、今後、流域委員会でご意見を伺いながら検討を深めていきたい（第二回）

2000年に起きた恵南（東海）豪雨災害は、高度経済成長とその後の社会情勢の変化に伴って矢作川流域住民が忘れかけていた「森・川・海の運命共同体としての相互関係」を再認識するきっかけとなったことが、これらの意見と回答からうかがえる。

流域圏懇談会設立総会の後、2010年12月17日に第一回勉強会を行うこととなり、市民会議山部会の役員の皆さん（部会長：稲垣久義氏、副部会長：黒田武儀氏、大島光利氏）にその運営が任された。勉強会の目的や内容を巡り、メールでのやり取りだけでは決めきれず、12月9日に新城市作手の黒田さんの自宅に関係者が集合した。当時の雰囲気記録を残すため、この時のメールのやり取りで黒田さんが書かれた「勉強会で議論すべき課題」の一部を紹介する。

○深刻な日本の山の危機、水の危機、と言葉では語られ続けていても、その深刻さの中身と実態を、どこまで共通の認識に高められているか。

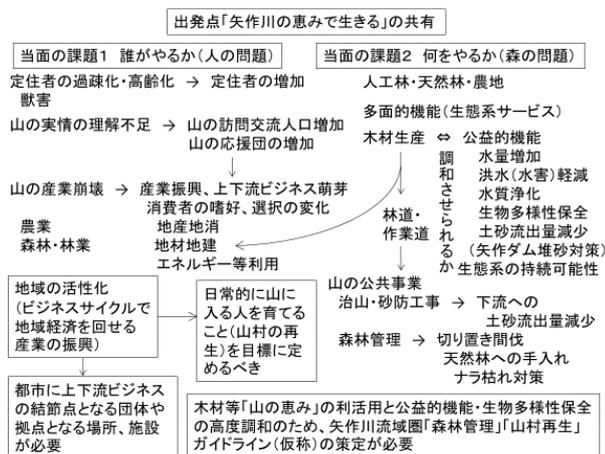
○山に暮らして、山に生きている、ほんとうの「山の百姓」が、ほとんどいなくなってしまっている現状の認識が、どの深度で理解されているか。

○大規模山林所有者である林家と、圧倒的多数の零細な裏山を所有するに過ぎない百姓たちとの間にある、決定的な意識や経験や技術の差が、山の問題にとって、どう関わっているか。

○山の問題が、山に生きているわけではない市民の間で、研究室で、行政機関の事務室で語られていることと、山の実態との間にあるものの微妙なギャップを、明らかにして、そこからどう出発するか。

勉強会では、懇談会メンバーに、流域の山と山村の現状・問題点を整理し、出発点を共有していただくことを目的として、生れも育ちも山村の大島さん、山村へ移住された黒田さん、外部からのボランティアの立場の稲垣さんと蔵治が話題提供を行った。しかし開催後には参加者から「学識経験者の意見が聞きたくて出席しているのではありません。また、一部の団体だけの活動を聞きたいわけでもありません」「第2回勉強会も今回同様のパターンならば、参加する意味が少ない。市民団体を集めて何をさせたいのか」といった意見も寄せられ、流域圏懇談会という組織の運営の難しさを思い知らされた。

続いて2011年1月に行われた第一回地域部会の山部会では、山を守り、水を守り、国土を守るために、毎日毎日「日常の営為」として、その役割を担い続ける「担い手」がいなくなってしまうつつある現状を踏まえ、当面取り組むべき課題を人の問題と森の問題の二つに整理し、「出発点『矢作川の恵みで生きる』の共有」と題した図にまとめた。しかし事務局から「この図は流域圏として共通認識できる資料とはいえない」という厳しい評価を受けた。さらに、事務局補佐を請け負っていた民間企業の、あらかじめ決めておいた方向に議論を誘導するやり方に「自由な意見交換にならない」「参加しても面白くない」と感じた人たちが会議から離れていった。



この状況を打破するため、山部会の有志が全体に呼びかけ、2011年5月に市民企画会議ワーキンググループ(WG)を立ち上げ、メンバー全員が矢作川流域の山、川、海を見て回る1泊2日のバスツアーを9月に行った。また山の抱える切実な問題が川や海のメンバーに理解されていないことへの危機感から、8月の山部会主催の勉強会で参加者全員に放置人工林に入ってもらい、森の健康診断を体験してもらった。さらに、人の問題と森の問題の過去から現在までの経緯、今何しなければ近未来にどうなるか、どのような未来の姿が理想かを出発点として共有した上で、課題とその解決のための具体的な手法を整理して2012年2月の地域部会に提示した。この地域部会での議論を経て、課題と解決手法が決められた。

(2012.5.19 修正版) 4



提案された4つの課題の解決手法の担当者は、「山村再生担い手づくり事例集」(その後「流域圏再生担い手づくり事例集」に進化)が洲崎燈子氏、「上下流ビジネスサイクル」(その後「山村ミーティング」に進化)が丹羽健司氏、「森づくりガイドライン」が蔵治と決まった。「木づかいガイドライン」は、根羽村森林組合の今村豊氏が快く引き受けてくださった。

2012年度から、地域部会山部会(2019年度より「まとめの会」に改称)は年に1回、全体会議の直前に開催することとし、それ以外の会議はすべて山部会WGと位置づけることとした。そして山部会WGは、岡崎、豊田、恵那、根羽の四地区を巡回する方式で概ね年8回開催し、そのうち半分の4回は泊まり、残りの回は日帰りで開催することとした。自家用車で集まる会議であれば、終了後に懇親会を企画しても参加者があまり見込めないが、現地で一泊すれば夜の懇親会、翌日のフィールドワークを同時開催できると考えた。何よりも

重視したのは、参加して楽しく、有益だと参加者に思ってもらえるかどうかである。楽しくなければ、やがて人は減っていき、持続的でなくなる。楽しいからこそ、人びとは喜んで飲み物持参で自発的に集まってくる。

2019年12月で山部会WGは54回を数えた。10年の節目を迎えたが、黒田さんが提起した課題や、山部会が整理した人と山村の課題、森林の課題のいずれも、その解決には程遠いと言わざるを得ない。この間、流域圏懇談会山部会は、災害に強く、恵みを分かち合える「流域圏コモンズ」をつくりあげる原動力となる「相互信頼関係に基づく人間関係」の構築を目指して、広大な矢作川流域圏の山で活動している者同士が、情報共有や意見交換を超えて、互いを深く知り、信頼し合い、切磋琢磨する場として機能してきた。設立から10年を経た今でも、この機能の重要性は設立当時からいささかも変わっていない。今後、私たちが、山で生きる者同士の連帯にとどまらず、「矢作川の恵みで生きる」出発点を流域圏全体が共有し、山村の住民と都市の住民がお互いのライフスタイルに共感し、連帯する真の流域圏社会の実現を目指すなら、流域圏懇談会山部会の機能は、今後ますます重要となっていくと感じている。